

日本中國學會報 第七十集
二〇一八年十月六日 發行 拔刷

穆時英におけるモダン都市の性愛と堀口大學

——「南北極」および「被當作消遣品的男子」を中心に——

福長 悠

穆時英におけるモダン都市の性愛と堀口大學

——「南北極」および「被當作消遣品的男子」を中心に——

福長 悠

一 緒論

一九三〇年の上海文壇に彗星のように現れた穆時英（一九二二—一九四〇）は、現在では「中國新感覺派」の代表的な作家として知られている。穆時英の活動は、一九三〇年に雑誌『新文藝』に「咱們的世界」（おれたちの世界）（第一卷第六號、一九三〇年二月）および「黒旋風」（第二卷第一號、一九三〇年三月）を發表したことに始まる。これらの作品は、俗語を織り交ぜた一人稱の語りによって、下層民の生活や感情を描くものであったため、穆時英は一躍左翼文壇で注目されるようになる。この時期の代表作は、「南北極」^①である。

穆時英が處女作を掲載した雑誌『新文藝』の同人は、モダニズム文學や日本の新感覺派を紹介する一方で、マルクス主義の文藝理論を翻譯した「科學的藝術論叢書」を刊行するなど、左翼文藝の紹介にも努めていた^②。

『新文藝』同人の傾向は穆時英に影響を与え、穆時英が一九三一年一〇月に發表した中編小説「被當作消遣品的男子」^③（暇つぶしにされた男）は、上海の大學のキャンパスを舞臺に男女の戀のかけひきを描いた、

新感覺派的な作風の作品である。

穆時英が短期間のうちに異なる作風に舵を切ったことは、當時から注目を集めてきた^④。先行研究においても、李征氏が穆時英の最初の二つの短編集『南北極』および『公墓』所収の作品を、「寫實的な作風」と「新感覺派的な作風」の二つの類型に分類するなど、作風の變化は一つの論點であった。

拙論は、穆時英作品における戀愛と性愛の問題を切り口に、作風の轉換に新たな視角を提供しようと試みるものであり、特に日本の詩人堀口大學（一八九二—一九八一）の引用に着目する。穆時英は初期を代表する作品「南北極」と、新感覺派的な作風の第一作「被當作消遣品的男子」で、どちらも堀口大學の詩句を引用している。引用される堀口の詩句は、都會的で享樂的な男女關係を詠ったものであり、前者においては、堀口の詩に主人公は反感を抱くのに對し、後者の主人公は、堀口の詩に好意を持ち、模倣しようとしてとめる。

二 初期の作品「南北極」における性愛

「南北極」は、山村出身の青年「小獅子」の一人稱の語りによる。

あらずじは以下の通りである。

小獅子は山村で羊飼いをするかたわら、父に武術を習う腕白な少年だった。彼には玉姐兒という幼なじみがいた。しかし、玉姐兒は街に住む従兄と婚約してしまう。玉姐兒の結婚の日、小獅子は家を飛び出して上海に向かう。

上海に着いた小獅子は、屈辱をこらえて乞食をする。後には人力車夫になるが、貧しい生活に変わりはない。小獅子は貸間の大家「張老頭兒」（張じいさん）の紹介で資本家「劉老爺」（劉旦那）の用心棒の職を得たが、そこで見たのは、これまでの貧しい生活からは想像もつかない奢侈であり、一家の誰もが享樂にうつつを抜かす姿であった。

一方で、張老頭兒は失業に病氣が重なり、貧困に苦しむ。小獅子は張老頭兒の妻が自動車事故で倒れているのを目撃する。屋敷に戻ると、劉老爺が小獅子の職務怠慢をとがめるが、高壓的な命令や奢侈な生活に憤っていた小獅子は、劉老爺を投げ飛ばす。「誰的脰膊粗、拳頭大、誰是主子。等着瞧、有你們玩兒樂的日子！」（腕がぶつとくて、拳がでつえやつこそが、ご主人様なんだよ。見てやがれ、お前らがあとどれくらい遊びまくつてられんのかよ）（八四ページ）という捨て臺詞を残して小獅子は屋敷を去る。

小獅子のまなざしが「有錢人」（金持ち）と「窮人」（貧乏人）の格差に注がれており、社會の下層から憤りを表明したものであることは間違いない。以下は小獅子が劉家の屋敷で一年半用心棒を勤めた後の語りである。

我在那兒當了一年半保鏢的，他們的活兒我真瞧不上眼。我有時到張老頭兒家裏去，瞧瞧他們，回來再瞧瞧老爺少爺，晚上別想睡覺。不能比！瞧了那邊兒不瞧這邊兒，不知道那邊兒多麼苦，這

穆時英におけるモダン都市の性愛と堀口大

邊兒多麼樂。瞧了可得氣炸了肚子！（穆時英「南北極」八二ページ）
おれは劉家で一年半用心棒をつとめたが、あいつらのやつてることは本當にまったく氣に食わねえ。おれは時々張じいさんの家に行つて、會うようにしてたが、歸つて旦那様やお坊ちゃんを見ると、夜も眠れなくなる。比べもんになんねえ！ あつちだけ見てこつちを見なけりゃあ、あつちがどんだけ苦しんで、こつちがどんだけ楽しんでるかも知らなかった。見ちまつたら、ブチ切れちまわあ！

小獅子は、元の大家である「張老頭兒」（張じいさん）と、劉家の格差を目撃し、「晚上別想睡覺」、「瞧了可得氣炸了肚子」と、生理的あるいは感情的な昂ぶりを表明する。引用に續いて、彼は「誰是天生的貴種？誰是賤種？」（生まれつきご立派な血筋や、賤しい血筋なんてあるのか？）と、格差に對する強い反感を語る。

こうした語りは、同時代の左翼文壇の注目を集めたと思われる。例えば陽翰笙は「小獅子確實一條反叛上層社會的英雄好漢」（小獅子はたしかに上層社會に反旗をひるがえした英雄好漢である）と評價する。ただし、主人公の「一種盲目的憤憤的感情，一種英雄主義的個人的豪氣」（盲目的な憤しみと憤りの感情、英雄主義的で個人的な豪氣）には批判を加える。⁶⁾

作品の主題の一つが、都市における經濟的格差であることは、間違いない。一方で、作品には様々な女性が登場し、小獅子の彼女らに對する反感や同情がにつづられる。とりわけ印象的なのは、美貌と財力を兼ね備えたモダン・ガールに對して、主人公が示す反感である。

用心棒を勤めている小獅子は、雪が降つたある夜、劉公館の庭を歩いているときに、劉老爺の「五姨」（五番目の妾）と「少爺」（坊ちゃん）

の不倫の場面を目撃する。

山兜兒的那邊兒有誰在說話。我一聽是少爺的聲氣：

「青色的月光的水流着，

啊啊山兜兒是水族館……」

那小子獨自個兒在鬧什麼？我剛在納罕，又來了一陣笑聲，還夾着句：「去你的吧！」是五姨太太！好傢伙！猛的天羅地網似的來了一大囀嚙，架也架不開，是那小媳婦的紗袍兒，接着不知什麼勞什子衝着我飛來，我一伸手接住了，衝着臉又飛來一隻青蝴蝶似的東西，我纔一擡手，已搭拉在臉上了，蒙着眼，月亮也透着墨不溜湫的，扯下來一看，媽的，一隻高跟皮鞋，一雙絲襪子！拿小媳婦的襪子望人家臉上扔，好小子！

「袒裸的你是人魚，

啊啊你的游泳……」

什麼都扔過來了！（穆時英「南北極」八一—八二頁）

築山のふもとあたりで、誰かが話している。聞きゃあ、坊ちゃんの聲だ。

「青い月光の水が流れて、

ああ山のふもとは水族館だ」

あの野郎一人で何してやがる？ 奇妙に思っていると、笑い聲がして、「あらよしてよ！」ときた。五姨だ！ そういうことかい！ いきなりあつちやこつちやから網みてえなだばつとした物が飛んできて、避けようにも避けきれねえ。あの淫賣の絹の上着だ！ 續けて何だか譯のわかんねえもんが飛んできたんで、手を伸ばして掴んだら、次は顔に青い蝶々みてえなものが飛んできた。手を舉げたら、もう顔にはりついて、目にかぶさつて、お月さまも真

つ黒けだ。引つpegがして見たら、こんちきしょう！ ハイヒールと絹の靴下だ！ 淫賣の靴下を人様の顔に投げるたあ、あの野郎！

「裸のきみは人魚である、

ああきみの游泳……」

何もかも投げつけてきやがつて！

小獅子が築山のふもとを歩いていると、少爺が詩を口ずさむのを聞く。「好傢伙」、「媽的」、「小媳婦」などの俗語を用いた、粗野な言葉遣いのなかにあつて、引用されている詩のみが異彩を放つ。これは、實は堀口大學の詩「月夜」の中國語譯の、ほぼ形を變えない引用である。

【資料】堀口大學「月夜」『堀口大學詩集』（第一書房、一九二八年六月）三〇二—三〇三ページ。（傍線部は「南北極」との一致部分を示す。また、「」は改行を示す。）

ランプを消せば／月かげが流れ込んで／書齋が／寢室に變る
／青い月光の水が流れて／ああ 寢室は水族館だ／裸のかの女は人魚である／ああ かの女の游泳

【資料】白璧（劉呐鷗）譯「堀口大學詩抄」『新文藝』第一卷第四號（一九二九年二月）六八五—六八六ページ。

把燈一熄／月光流進來／書齋／變爲寢室／青色的月光的水流着／啊啊 寢室是水族館／袒裸的她是人魚／啊啊 她的游泳
中國語の譯詩が掲載された『新文藝』第一卷第四號は、穆時英の處女作「咱們的世界」が掲載される直前の號にあたり、穆時英が目にしたことは確實である。翻譯者の白璧は、劉呐鷗の筆名である。劉呐鷗は『新文藝』同人の出資者兼編集者であり、新感覺派を中國に紹介した人物として知られる。第一卷第四號の「堀口大學詩抄」では、

上記の「月夜」を含む十首の詩を翻譯し、最後に短い「譯者附記」を付す。「月夜」の詩は、「書齋」を「寢室」「水族館」に喩え、月明かりのもと人魚に喩えられる「かの女」を鑑賞するという艶詩であるが、エロスは暗示されるに留まっている。堀口の詩は「知情意のほどよく調和した密度の高いエロチック」を表現したものであると評價されるが、「月夜」も例外ではないだろう。

穆時英が引用するのは、詩の後半部分である。小説の場面に合わせて「寢室」を「山兜」に変え、「她」を「你」に変えたほかは、劉呐鷗による翻譯の引き寫しである。モダン・ボーイである少爺の語りにおいて、父の妾である五嬢の氣を引くために、堀口大學が引用されている。引用の文脈において、堀口の詩は人倫を顧みない享樂的な戀愛、あるいは物質文明に浸されたブルジョワの輕薄さと結びつけられている。

主人公の小獅子は、もとより好感を示さない。「紗袍」や「高跟皮鞋」を投げつけられる彼は、この場面の滑稽な傍觀者である。「拿小娼婦的襪子望人家臉上扔，好小子！」（淫賣の靴下を人様の顔に投げるたあ、あの野郎！）と反感をあらわにする。

以上の引用において小獅子は傍觀者であり、自身がモダン・ガールと性的な關係を結ぶことはない。しかし、以下では、小獅子自身が、モダン・ガールと性的な關係を結ぶ。劉老爺の愛人の一人「段小姐」は、小獅子の肉體に興味を持ち、一夜の相手をさせるよう劉老爺に求め、劉老爺も承諾する。小獅子は段小姐の部屋に招かれる。

我滿想不理她，可是那酒就怪，喝了下去，熱勁兒從我腿那兒直冒上來，她回過頭來說道：「別裝正經，要個嘴兒啊！」她攢着嘴唇迎上來。好個騷狐精，那嬌模樣兒就像要吞了天，吞了地，媽

的吞了我！（穆時英「南北極」八二ページ）

絶対に構うもんかと思っていたが、あの酒は何だか妙で、飲み下すと、股ぐらから熱いモンがグワーツとせり上がってきた。女は振り向いて言った。「堅物のフリしないで。キスしてちょうだい！」女は唇をにゅつと突き出して待ちかまえてる。何じやい、このど淫亂の女狐め、艶っぽい姿は空だつて飲み込んで、地面も飲み込んで、ちくしょうおれまでも飲み込んだじまつた！

段小姐は小獅子を誘惑する。小獅子は「我滿想不理她」という意思を貫き通すことができず、酒の勢いに驅られて段小姐と關係を結ぶ。

小獅子が夜中に目を覺ますと、「月光正在照在牀上，牀也青了，她像躺在草上的白羊」（月の光が寢臺を照らして、寢臺も青くなって、あいつは草に寝そべっている羊みたいだ（八二ページ）という描寫が續く。「月光」に照らされた「青」い寢室というモチーフは、彼が唾棄した堀口大學の詩句「青い月光の水が流れて／ああ 寢室は水族館だ」を連想させる。さきの場面では拒否していた情景のなかに、小獅子は入り込んでしまう。

小獅子は慌てて逃げ歸るが、「像怕鬼趕來似的，我一氣兒跑了回來。往後我見了她，她一笑，我就害怕。咱小獅子怕她！我自家兒也不明白是怎麼一回兒事」（幽靈にでも追つかけられてるみてえに、一氣に走って歸った。その後おれがあいつに會うたび、あいつは笑いかけてくるが、怖えのなんの。この小獅子さまがあいつを怖がるだと！ 自分でも何が何やらわかんねえ（八二ページ）というありさまであった。

モダン・ガールとの關係は、反發と拒否から屈服へ、そして恐怖へ至る。その恐怖について、主人公は言語化することができない（「自家兒也不明白」）。

史書美氏は、穆時英の初期の作品「黒旋風」において、田舎出身の女性が主人公たち田舎の青年を裏切り、都市文化を體現した男性のもとに走ることと、田舎の下層階級が壓迫を受けていることの因果關係を指摘する。さらに「南北極」については、以下のように分析する。

穆が田舎の下層男性の典型として描いた人物は、自分は女性に捨てられたとみなしており、彼女が選んだモダンティと都市は、彼を二重に壓迫する。その壓迫に對抗するために、『南北極』の男性主人公たちは、義氣と義侠心という極端に男性的な觀念をひけらかし、資本家の誘惑と墮落に對する批判を、きわめて男權主義的な企てとみならず。

男性性の誇示の背後には、「モダンティと都市」による二重の壓迫があると、史書美氏は指摘する。史氏の分析に従うなら、「南北極」の語り手が、経済的格差への不満と同時に、セクシュアリティの欲求不満に關しても語っていることは、見落とせない。スーザン・マン氏は「一九世紀の中國では（中略）女性はほぼ一〇〇%が結婚したが、男性は二〇%近くが一生結婚しないままだった」點に着目し、結婚の機會がない貧困層の男性すなわち「光棍」が社會問題であつたこと、「光棍」の男性たちが秘密結社の成員や山賊となり、治安上の問題を引き起こしたことを指摘する。

『南北極』所收の他の作品においても、下層男性の性愛は重要な主題である。處女作「咱们的世界」の主人公は、上海で新聞を賣りながら「偷閑瞧畫報裏的美人兒」（暇を見てはグラビアページの美人を見ていた）。彼が欲望するのは、「小高跟兒的；鑲亮的絲襪子，怪合式的旗袍」（ちっちゃなハイヒールに、きらきらした絹の靴下、ぴちぴちのチャイナドレス）を身に着けたモダン・ガールであつた。彼は友人の誘いを受け

て海賊に身を轉じ、客船を襲撃する場面では、あらかじめ目をつけていた「委員夫人」を凌辱する。

第二作「黒旋風」の主人公は、上海近郊の勞働者である。彼が尊敬する「汪大哥」（汪兄貴）の戀人「小玉兒」は、金持ちの學生に靡いて、「汪大哥」を捨てる。學生と付き合うようになった小玉兒は、新しい戀人が買ってくれたハイヒールと、汪大哥から贈られた絹の靴下を履いている。「她有了絲襪就愛汪大哥，見了高跟鞋就跟學生——女人眞不成東西」（あいつは絹の靴下をもらやあ汪兄貴を好きになり、ハイヒールを見りやあ學生について行く——女なんざ話にもなりやしねえ）と主人公は怒りを漏らす。どちらの作品でも、モダン都市上海のヒエラルキーにおいて、下層の男性が性愛においても欲求不満に陥るさまが描かれる。

「南北極」において繰り廣げられる愛と性の葛藤は、兩作品と連續している。下層の男性は性的に抑壓され、モダン・ガールを手に入れることができない。身體能力の優越は、貧困や性的な欲求不満を解消する材料にはなりえない。そればかりか、「南北極」においては、身體能力の誇示がかえつて女性に弄ばれる材料になるといふ、皮肉な筋立てにより、男性性の危機が強調される。段小姐が小獅子に關係を迫つた理由は、「看上我身子結實」（おれのがたいが良いのが氣にいつた）（八二ページ）というものであつた。モダン・ガールは、主人公を壓迫する「モダンティと都市」を體現するがゆえに、性的な欲求不満と経済的格差への不満を同時にかきたてる。

ただし、「南北極」において、都市の上層に對する主人公の感情は、單なる不満にとどまらない複雑な一面を伴う。男性の資本家に對して、主人公は一貫して反感を持ち、誘惑に屈することなく用心棒の職を辭す。しかし、モダン・ガールの誘惑の前に、主人公は性的欲求を制御

できず、反発から屈服、さらに恐怖へと至る、より複雑な感情を露わにする。性愛の主題は、身體や生理のレベルに根差した複雑な感情として、モダン都市の體驗を描くことを可能にしている。ここでは、モダン・ガールへの屈服は生理的欲求に根差したものであり、堀口大學の洒落た詩の表現に、主人公自身が關心を抱くことはない。とはいえ、都會的な性愛に堀口の作品を結びつけるという構圖には、穆時英がのちに作風を變える豫兆が現れている。

三 「新感覺派」的な作品「被當作消遣品的男子」における戀愛

以下に取り上げる「被當作消遣品的男子」は、一九三一年一〇月に單行本として出版された。穆時英がプチ・ブルジョワを主人公とした第一作である。

上海の大學生である主人公の一人稱により、「蓉子」という女性との戀愛が語られる。「海棠那麼可愛的紅緞的高跟兒鞋」（海棠のように愛らしい赤い緞子のハイヒール）（二ページ）をはいた彼女もまた、流行の装いに身を包むモダン・ガールである。主人公は「女性嫌惡症」を患っている。逢引きの最中に蓉子に勿忘草を手渡された主人公は、以下のように考える。

天哪，我又擔心着。已經在她嘴裏了，被當作朱古力糖似的含着！我連忙讓女性嫌惡病的病菌，在血脈裏加速度地生殖着。（穆時英「被當作消遣品的男子」六一七ページ）

なんてことだ、ぼくはまた不安になつてきた。もう彼女の口のなかに、チョコレートみたいに入つてるんだ！ぼくはすぐさま女性嫌惡病的病菌を、血管の中で加速度的に殖やそうとした。

穆時英におけるモダン都市の性愛と堀口大學

「ぼく」は蓉子の魅力に耽溺しつつ、同時に蓉子に捨てられる不安を抱きながら交際する。愛情の進展の速さに戸惑いつつ、「ぼく」は「努力在戀愛下面，建築着友誼的基礎」（戀愛の下に、友情という基礎を築こうと努力）（二二ページ）し、蓉子の文學趣味を探る。

「你讀過茶花女嗎？」

「這應該是我們的祖母讀的。」

「那麼你喜歡寫實主義的東西嗎？譬如說，左拉的娜娜，朵斯退益夫斯基的罪與罰……」

「想睡的時候拿來讀的，對於我是一服良好的催眠劑。我喜歡讀保爾穆杭，橫光利一，堀口大學，劉易士——是的我頂愛劉易士。」

「在本國呢？」

「我喜歡劉吶鷗的新話術，郭建英的漫畫，和你那種粗暴的文字，獷野的氣息……」（穆時英「被當作消遣品的男子」二二—二三ページ）

「椿姬は讀んだことがある？」

「私たちのおばあちゃんが讀むような本だわ」

「なら、寫實主義のものは好き？ たとえば、ゾラのナナとか、ドストエフスキーの罪と罰とか……」

「眠りたいときに讀むものよ、わたしにはいい睡眠薬よ。わたしはポール・モーランとか、橫光利一とか、堀口大學とか、ルイスが好き——そうよわたしはルイスが大好きなの」

「この國では？」

「わたしは劉吶鷗の新しい話術、郭建英の漫畫、それにあなたの粗暴な文章と、荒っぽい息遣いが好きよ。」

このくだりは、穆時英自身の愛好を示すものとして、たびたび引用

されてきた。⁽¹⁶⁾ 蓉子が好むのは、ポール・モーランであり、横光利一であり、堀口大學である。これらの名前は、新感覺派と関連付けることができる。横光利一は日本の新感覺派を代表する人物である。ポール・モーラン（一八八八—一九七六）はフランスの文學者であり、『夜ひらく』などの作品は新感覺派の形成に影響を與えたといわれる。モーランの日本における受容には、堀口大學の翻譯文體が大きな役割を果たした。⁽¹⁷⁾ モーランを中國の讀者に紹介したのは劉炳鷗である。⁽¹⁸⁾

好きな中國の作家として蓉子が語る「和你那種粗暴的文字，曠野的氣息」（あなたの粗暴な文章と、荒っぽい息遣い）という言葉は、下層民の俗語を用いた『南北極』の文體を連想させる。主人公のモデルは、穆時英その人であることを暗示する身ぶりであろう。

蓉子の答えを聞いた主人公は「眞是在刺激和速度上生存着的姑娘哪，蓉子！ Jazz，機械，速度，都市文化，美國味，時代美……的產物的集合體」（ほんとうに刺激と速度のうえに生きている娘だ、蓉子は！ ジャズ、機械、速度、都市文化、アメリカ趣味、時代美……の產物の集合體）（二二ページ）と考える。穆時英においては上記の作家の名前が、「都市文化」と結びつくものとして理解されていたことも明らかである。

蓉子の趣味に歩み寄ろうとした軌跡は、「ぼく」の語るテキスト自体にもうかがえる。以下の場面で、「ぼく」は蓉子の魅力の前に屈服し、蓉子が他の男と外出するのを許すようになっていく。「ぼく」は外出先から歸った蓉子と落合ひ、接吻をねだる。傍線部で、「ぼく」による語りは堀口大學の詩句を模倣した表現を用いている。

記得有一天晚上，她在校外受了崇拜回來，紫色的毛織物的單旗袍，——在裝飾上她是進步的專家。（中略）還是唱着小夜曲，雲似地走着的蓉子。在銀色的月光下面，像一隻有銀紫色的翼的大

夜蝶，沉着地疏懶地動着翼翅，帶來四月的氣息，戀的香味，金色的夢。拉住了這大夜蝶，想吞她的擦了暗紅的 Tangee 的嘴。把髮際的紫羅蘭插在我嘴裏，這大夜蝶從我的脰膊裏飛去了。（穆時英，被當作消遣品的男子，四六一—四七二頁）

覺えている、ある晩、彼女が校外で崇拜を受けて歸ってきた、紫色の毛織の單衣のチャイナドレスだった——お洒落の點でも彼女は先をゆくプロフェッショナルだ。（中略）やはりセレナーデを歌いながら、雲のように歩いている蓉子。銀色の月光のもと、銀紫色の翼をもった大きな夜の蝶のように、沈んでものうげに羽を動しながら、四月の息吹と、戀の匂い、金色の夢を運んでくる。この大きな夜の蝶を引き留めて、彼女の暗紅色の Tangee を塗った唇を飲み込みたい。髪が生え際の紫羅蘭をぼくの口に挿して、この大きな夜の蝶は僕の腕から飛び去っていった。

「ぼく」は蓉子を引き留めようと口説き、「毎天要說一百句恭維我的話」（毎日百個のお世辭をちょうだい）（四八二頁）と言われ、承諾する。二人は別れる。

她去了以後，留下一種優柔的溫暖的香味，在我的周圍流着，這是我們的愛撫所生的微妙的有機體。在這戀的香味氳氳的地方，我等新的夜來把她運送到我的懷裏。可是新的夜來了，我卻不說起這話。我接連三天不去瞧她。（穆時英「被當作消遣品的男子」四八二—四八三頁）

彼女が歸ったあとには、やさしいあたたかい匂いが残って、ぼくの周囲を流れる、これはぼくたちの愛撫が生んだ微妙な有機體だ。この戀の匂いが漂うところで、ぼくは新しい夜が来て彼女をぼくの懷に運ぶのを待っている。でも、新しい夜が来て、ぼく

はそんな話を持ち出せなかった。ぼくは續けて三日も彼女に會いに行かなかった。

「ぼく」は蓉子を「一隻有銀紫色的翼の大夜蝶」に喩える。彼女が去つた後に残る「戀の香味」を嗅ぎながら、「ぼく」は「新的夜」に彼女と再會することを待ち望む。以上の表現は、堀口大學の詩「室内」を襲用したものである。「室内」もまた、劉呐鷗によって中國語に譯され、『新文藝』に掲載された詩の一つである。以下に原詩と中國語譯を擧げる。

【資料】堀口大學「室内」『堀口大學詩集』（第一書房、一九二八年）
一一〇—一一一ページ。（傍線部は「被當作消遣品的男子」との一致部分を示す）

お前が歸つたあと私の室の内に／やさしいあたたかいものの句
ひが残つて／私の周圍に漂ひ私の内に流れる／これは私たちの愛
撫が生んだ微妙な有機體だ／銀と紫の翼をもつた大きな夜の
蝶のやうに／重たげにもうげに羽を動しながら／匂ひは壁に沿
うて窓の方へ流れる／匂ひののがれ去るのを怖れる心から／私
は窓と戸口とをかたくとぎす／匂ひはなつかしいお前の思ひ出だ
からだ／おしつぶされたクウサンとよれかたまつた白布と／わ
れ等の夜がつくつた美しい不秩序をそのままに／やさしくあたた
かい戀の匂ひの漂ふ室内に／私は新しい夜が來てお前を私の戸
口へ運ぶのを待つてゐる

【資料】白璧（劉呐鷗）譯「堀口大學詩抄」『新文藝』第一卷第四號、
一九二九年一二月、六八六ページ。

你去了之後的我的室内／留下着一種優柔的溫暖的香味／在我的周
圍氤氳 我的心裏循環／這是我們的愛撫所生的微妙的有機體／

穆時英におけるモダン都市の性愛と堀口大學

像一個有銀紫色的翼的大夜蝶／沉重的疏懶地動着翼翅／香味沿着
壁向窗邊流去／生怕香味逃了去／我把窗和門緊緊地關上／因爲
香味是可懷的你的記憶／／不管壓平了墊子和皺亂的白布和／我
們的夜所做的美麗的無秩序／在優柔溫暖的戀的香味氤氳着的室内
／我等着新的夜來把你運到我門口

堀口大學の詩「室内」においては、「私たちの愛撫」、「よれかたまつた白布」が情事を暗示する。「お前が歸つたあと」、「私は新しい夜が來てお前を私の戸口へ運ぶのを待つてゐる」という表現は、二人が婚姻外の關係であることを暗示する。詩は「戀の匂ひ」を室内に「かたくとぎす」という表現によって、戀人に對する愛着を詠う。

穆時英のテクストは、堀口大學の詩句を襲用する。「匂ひ」の直喩である「銀と紫の翼をもつた大きな夜の蝶」は、劉呐鷗により「一個有銀紫色的翼の大夜蝶」と翻譯され、蓉子の容姿を喩える「一隻有銀紫色的翼の大夜蝶」に使われる。原詩の「銀と紫」は、匂ひの直喩であると同時に、「私」の室内の「重たげ」で「もうげ」な雰圍氣の隱喩であろうか。穆時英においては、「紫」は「紫色的毛織物的單旗袍」に、「銀」は「銀色的月光」に、あらかじめ敷衍され、蓉子の艶やかさを強調する表現に變えられている。

原詩で「匂ひ」を描寫する第一聯は、蓉子が去つた後の残り香を描寫する表現に書き換えられる。戀人の残した匂ひを「留下一種優柔的溫暖的香味」とするのは、堀口の詩句「やさしいあたたかいものの匂ひが残つて」の譯「留下一種優柔的溫暖的香味」の襲用である。また、その匂ひを、「這是我們的愛撫所生的微妙的有機體」と説明する點も、堀口の詩句「これは私たちの愛撫が生んだ微妙な有機體だ」の譯「這是我們的愛撫所生的微妙的有機體」と字句を變えていない。最終的に、

「ぼく」は「我等着新的夜來把她運送到我的懷裏」と、ふたたび夜が訪れるのを待ち受ける。この表現もまた、堀口の詩の最後の句「私は新しい夜が来てお前を私の戸口へ運ぶのを待つてゐる」の譯「我等着新的夜來把你運到我門口」と同工異曲であり、人稱を「你」から「她」に替え、「戸口」を小説の状況に合わせて、「懷」に書き換えたのみである。

穆時英においては、「大夜蝶」を容姿の直喩に用い、女性の艶やかさをより強調する。「大夜蝶」すなわち蓉子は戀人である「ぼく」のもとを飛び去ることもできる奔放な存在として形象される。これらの表現は堀口大學の詩句を流用することによって得られたものである。

「ぼく」に對する蓉子の愛は、この場面を頂點として次第に薄れてゆく。二人は結ばれることのないまま、物語は完結する。

「ぼく」は蓉子という、「都市文化」を體現する女性を手に入れようとする。彼女が愛好する「堀口大學」の詩句は、語り手が蓉子との逢引きを描寫する場面に祕かに挿入される。「ぼく」は語りの文を通して、蓉子の文學趣味をもまた手中に収めようとしているのであろうか。彼の背後に隠れた作家穆時英は、堀口の詩句を襲用し、詩人へのオマージュを行っている。モダン・ガールを手に入れようとする主人公と、堀口大學を模倣する作家は重なり合う。

そして、「南北極」と比較して、「被當作消遣品的男子」の主人公の女性觀には、明らかな差異がみられる。先にも述べたように、「ぼく」は「女性嫌惡症」を自覺している。ところが、テクストを通して描かれるのは、意中の女性に對する屈服であり、彼女が手に入らないことへの自嘲である。

大學の學期が終わると、蓉子は父親が迎えに來たと告げ、主人公の

前から姿を消す。主人公は蓉子を思慕してやまない。「聽見每一個叫我名字的聲音，便狼似地豎起了耳朵，想聽到那渴望着的「Alexy」的叫聲。可是，不是她！不是她啊！」（ぼくの名前を呼ぶ聲を聞くたびに、狼のように耳をそばだて、あの渴望してやまない「アレクシー」という呼びかけを聞きとろうとする。でも、彼女じゃない！彼女じゃないんだ！）（五九一—六〇ページ）。しかし、ある日、友人が、「昨夜晚上我瞧見蓉子不是你的男子在巴黎跳舞」（昨夜蓉子が君じゃない男とパリで踊っていたのを見かけた）と告げる。家に歸るといふのは嘘であり、主人公は捨てられたのであった。「究竟是消遣品吧」（結局は暇つぶしだったんだ）（六一—六二ページ）と、主人公は嘆く。「孤獨的男子還是買支手杖吧」（孤獨な男はやはりステッキを買おう）（六一—六二ページ）と、「ぼく」が戀人の替わりに腕にかけるステッキを買う場面が作品は完結する。

堀口の詩において、戀人が「私」のもとに歸るかは定かでない。詩句からは、孤獨と愛着が餘情として漂う。「被當作消遣品的男子」においては、意中の女性は主人公のもとを離れて戻らず、主人公の「渴望」「孤獨」が明示される。失意の表現は堀口の詩よりも強い。

史書美氏は「被當作消遣品的男子」に關しては、以下のように分析する。

劉呐鷗の描くモダン・ガールたちと同じく、蓉子は都市のモダン・ニティを體現し、中國人の男性主人公にハリウッド式の都會的なロマンスを疑似的に體驗する機會を與える。しかし彼はその過程において自分が去勢されていることに氣付く。²⁰⁾

史書美氏は、蓉子が「都市のモダン・ニティ」を體現し、彼女との戀愛において男性主人公が去勢されることを指摘する。本作品における去勢とは、主人公が戀愛の主導權を握ることができず、女性の魅力の前

に屈服するという、男性性の危機を指すだろう。

新感覺派の作風を取り入れたのちの穆時英の女性嫌悪症については、李今氏がボードレールを嚆矢とする世紀末文學における女性嫌悪症の系譜を挙げて考察している²¹⁾。同時に、氏は穆時英の女性嫌悪症について、「以俏皮代替了詛咒」（呪詛を洒落つ氣に置き換えた）、「更貼近趨向奢侈的享樂、精致和美的法國式的頹廢」（奢侈な享樂や精緻さ、美に傾くフランス風の頹廢に近づいている）と指摘する²²⁾。氏が指摘するように、「被當作消遣品的男子」の結末からは、悲哀のみならず、諧謔や自嘲を読み取ることができる。堀口大學の詩は隱喩や直喩を駆使し、エロスは詩的な機知と暗示の奥に秘め隠されている。穆時英の都市小説に特徴的な、隱喩や直喩などの技巧を駆使し、洒落た軽快な筆致で男女關係を描寫する方法は、フランス現代詩に學んだ堀口大學と似通う点があるのではないか。

穆時英は堀口大學の詩句を作品に用い、堀口の詩的情緒や男女關係のありようを模倣しようと努める。だが、堀口大學が「室内」で書いた戀人との逢瀬は、「南北極」の小獅子が憎んだ、都市生活者の婚外交渉を暗示するのではないか。「被當作消遣品的男子」の語り手「ぼく」が蓉子の魅力に屈服してゆくと、穆時英の作風にも變化が起り、都市生活者の享樂的な男女關係を、主人公にとって好ましいものとして描寫するようになる。

作風の變化はやがて、左派陣營からの厳しい批判を招く²³⁾。穆時英は完全に左翼文學と袂を分かつ。のちに發表した「上海的狐步舞」、「夜總會裏の五個人」²⁴⁾等において、穆時英は本格的にモダン上海の男女關係と遊興を描くことになる。作風の轉換点において、穆時英が模倣したのは、横光利一ら日本の新感覺派の作家のみならず、堀口の艶詩で

あつた。穆時英のちに、雑誌『現代』誌上で日本の新感覺派の作家池谷信三郎に對する剽竊を指摘され、物議を醸したことがある²⁵⁾。都市文學への傾倒は、作家生命の危機を招きかねない方法でなされたものであつた。

四 結 論

堀口大學に對する主人公の態度の變化からは、穆時英がなぜ下層民を主人公に小説を書いたか、およびなぜ作風を轉換させたかについて、一定の解答を推量することができる。史書美氏の指摘によれば、「南北極」は下層民が「モダンテイと都市」による二重の壓迫のもと、男性性の誇示を試みたものである。主人公は「女性」に對するセクシュアリティにおいても、「モダン都市」における經濟的格差に對しても不満を抱き、都會的なモダン・ガールは主人公の二重の欲求不満をかきたてる。

先に挙げた陽翰笙に代表されるように、同時代の左翼文藝批評家たちは、「南北極」の口語表現を高く評價する一方で、作品のイデオロギー的側面には批判を述べていた。そもそも、處女作「咱們的世界」について、初出誌の編集者は「咱們的世界」在「Theologie」上固然是缺正確，但是在藝術方面是很成功的」（「おれたちの世界」はイデオロギーの面では正確さを缺いているが、藝術の面では成功している）と述べる²⁶⁾。穆時英が描く貧困男性のセクシュアリティは、左派のイデオロギーによる理解とは異なる表象であつた可能性がうかがえる。

「被當作消遣品的男子」において、主人公ははつきりと「女性嫌悪症」を表明する。女性に對する態度は言語化され、おすおすとではあるが、モダン・ガールと都會的な新感覺派文體を手に入れようと試みる。主

人公は意中の女性を手に入れられないが、作家は都會的な文體の魅惑に引き寄せられ、模倣により新たな文體を手に入れようとする。モダン・ガールへの嫌悪は、洒落た自嘲にとつて代わる。

モダン・ガールの形象と男性性の危機は、兩作品に共通する要素である。『南北極』所收の作品において、穆時英が下層民の俗語を用いた理由は様々に推測されてきたが、男性性の危機と、その反動としての男性性の誇示を語ろうとしたとき、相應しい形式として荒々しい俗語が選擇されたのではないかと考えられる。同様に、都會的なモダン・ガールとの對比を強調するために、男性主人公の地方出身や社會の下層という出自を強調する語りがなされたものと推測される。

しかし、「南北極」においても、主人公は最終的にモダン・ガールの前に抵抗する手段を失い、魅力の前に屈服する。段小姐は小獅子の性的欲求を満たしたうえで、彼を感溺とも恐怖ともつかぬ感情に陥れる。その直前に、堀口大學の艶詩が引用されている。「被當作消遣品的男子」をはじめとする新感覺派のな作品で描かれる都市の魅力への耽溺は、「南北極」にその端緒が現れているのではないか。

穆時英その人に女性嫌悪とみられる傾向がうかがえることも事實である。「女人」というエッセイにおいては、「我是一生下地來、就憎惡女人的」（ぼくは生まれてすぐに、女性を憎んだ）という⁽²⁸⁾。少年のころを回想し、お洒落に餘念がない妹を「小狐狸」と呼んだという。また、従妹の「玉妹妹」に戀をしたがすぎなくあしらわれたことを、「我是被當作玩具似的玩弄着」（ぼくは玩具にされたみたいに弄ばれた）と表現する⁽²⁹⁾。これらの體驗は、少年穆時英のなかに女性や享樂への嫌惡の種を蒔いたものであると思われる。このエッセイは、穆時英が文壇に登場した一九三〇年に發表されており、モダン・ガールへの嫌惡は、「南

北極」など初期作品の主人公の女性觀との連續性が見られる。「玉妹妹」に對する「我是被當作玩具」という感情は、「被當作消遣品的男子」の題を連想させる。しかし、その「被當作消遣品的男子」においては、主人公は「女性嫌惡症」を自覺するにもかかわらず、モダン・ガールへの耽溺を隠そうとしない。モダン・ガールに對する感情は、堀口大學の作風にも似た、洒落た輕快な詩的情緒によつて表現される。意中の女性は主人公のもとを去り、男性性は危機に晒されるが、主人公は自嘲によつて敗北を受け止める。堀口大學の受容は、穆時英における文體と女性觀の轉換を先導する役割を果たしたといえる。

穆時英に對する堀口大學の影響は、文學史的にはいかに評價することができらるだろうか。錢曉波氏は、中國におけるポール・モーランの受容が、堀口大學による翻譯や紹介を經由し、日本と中國の新感覺派に影響を與えたことを指摘したうえで、「ヨーロッパから日本へ、さらに日本から中國へ」波及した新興文學の傳播を分析する⁽³⁰⁾。劉呐鷗が旗振り役となり、ポール・モーランおよび堀口大學、横光利一を紹介したことは、三者が同質の文學であるという認識を、受容者の側に生んだと思われる。堀口大學は、當時の中國において紹介が多い文學者ではない。しかし、穆時英が一九三五年頃に編集を務めた『晨報』の副刊「晨曦」および、同誌の副刊「小晨報」には、穆時英、劉呐鷗ら中國新感覺派の作品に並んで、横光利一と堀口大學の翻譯が掲載されている⁽³¹⁾。中國新感覺派の作家が三〇年代の後半に至つてなお、横光と堀口に關心を抱いていたことが窺える。「小晨報」に掲載された堀口大學のエッセイ「望翠樓雜記」は、文學に關する逸話を集めた文章であるが、マラルメやアポリネールらに並んで、ポール・モーランの幼少期のエピソードが紹介されている⁽³²⁾。

穆時英自身も、「望翠樓雜記」と同日に「小晨报」に發表した「葡萄」と題するエッセイで、堀口の『季節と詩心』に觸れている。穆時英の死後、彼を堀口の作風に喩える評價も残る。これらは、穆時英が堀口大學に對して始終強い關心を抱いていたことを物語るだろう。中國新感覺派の外部からの評價においても、たとえば蘇雪林氏は、穆時英を論じた文章で、新感覺派の創始者はポール・モーランであると、日本の横光利一、堀口大學らに影響を与え、中國では施蟄存、穆時英が同派の代表者となったとしている。穆時英に對する堀口の影響は、中國新感覺派における新興の都市文學の受容の一例とみなすことができる。

「南北極」および「被當作消遣品的男子」より後に發表した作品でも、都市や近代は重要な主題であるが、書き方には變化が現れる。例えば、兩作品にやや遅れて發表した「斷了條臍膊的人」(片腕を切斷された男)⁽³⁶⁾は、下層男性の都市に對する恐怖を、體制に馴致されてゆく絶望として描く。主人公は工場で機械を操作している際に片腕を切斷され、貧困と一家離散に苦しむが、最終的には没個性的で代替可能な存在としての自己を受け入れる。馴致に至るまでの主人公の精神的苦痛は、夢や幻想を交えた反復表現により語られる。

「南北極」から「斷了條臍膊的人」に至るまでの作品で、穆時英は社會の異なる階層における、近代都市への反發、抵抗、恐怖、屈服、馴致などのさまざまな反應を書いている。しかし、一連の變化を通觀したとき、「南北極」に見られたようなモダン・ガールへのあからさまで激しい嫌悪は、徐々に消えていることがうかがえる。「被當作消遣品的男子」より後に發表された作品で、近代と都市に對する反發や不適應などの反應は重要な主題であるものの、モダン・ガールへの嫌

悪を媒介とせずに表現されている。穆時英は、心理表象や都市文學の文體など技巧上の展開を見せつつ、より一般的な「近代」の問題に關心を移してゆく。

注

(1) 穆時英「南北極」『小説月報』第二十二卷第一號(一九三二年一月)。脱稿は一九三〇年八月一日。單行本、『南北極』初版(湖風書局、一九三二年一月)、影印本(百花文藝出版社、二〇〇五年)に収録される。拙論では、初出を底本に用いる。

(2) 『新文藝』におけるモダニズム文學とプロレタリア文學の紹介については、王志松「劉呐鷗と「新興文學」——マルクス主義文藝理論の受容を中心として」(『上海』一〇〇年——日中文化交流の場所) 勉誠出版、二〇一三年)および、劉妍「中國モダニズム文學と左翼文學の併置と矛盾について——雜誌『無軌列車』、『新文藝』を中心に」(『アジア遊學』一六七、勉誠出版、二〇一三年八月)に詳しい。

(3) 穆時英『被當作消遣品的男子』(良友圖書印刷公司、一九三一年一月)。單行本、『公墓』(現代書局、一九三三年六月)に収録される。拙論では、初出を底本に用いる。

(4) たとえば、杜衡「關於穆時英的創作」『現代出版界』第九期(一九三三年二月)一〇ページに、「顯然地、無可諱言而且無容諱言地、時英在創造上是沿着兩條絕不相同的路徑走。他的作品、非常自然地可以分成兩個型類：一是「南北極」之類、一是「公墓」之類、而這兩類作品自身也的確形成了一個南北極。就是我個人最初看見「公墓」的時候也就覺得非常地詭異。／這種二重人格的表現就成爲對時英的一切非難的總因」。

(5) 李征「中國三十年代文學における新感覺派小説手法の受容——穆時英

- の『共同墓地』をめぐって——『文學研究論集』第二一號（一九九四年）。のちに、『表象としての上海——日本と中國の新感覺派文學運動に關する比較文學的研究』（東洋書林、二〇〇一年二月）に、「租界上海の「都市風景線」——穆時英の「もて遊ばれた男」を中心に」として収録される。
- (6) 寒生（陽翰笙）「南北極」「北斗」創刊號（一九三二年九月）一二二ページ。
- (7) 「月夜」は詩集『砂の枕』（第一書房、一九二六年）に収録されたのち、堀口大學詩集』に収録される。兩者に異同はない。劉呐鷗が翻譯に用いた底本は不明であるが、「譯者附記」に堀口の著作として『堀口大學詩集』を挙げていることから、底本に用いた。
- (8) 許秦泰「專訪上海施蛰存談劉呐鷗」康來新、許秦泰編『臺灣現當代作家研究資料彙編53劉呐鷗』（國立臺灣文學館、二〇一四年）一二四ページ。
- (9) 柳澤健「堀口大學小論』『國文學 解釋と鑑賞』一九七七年一月號、三六二—三六三ページ。
- なお、この評價は「乳房」という詩に對するものである。「乳房」は劉呐鷗の手で中國語に翻譯され、「堀口大學詩抄」として發表された詩の一つである。
- (10) Shu-mei Shih, *The Lure of the Modern: Writing Modernism in Semicolonial China, 1917-1937*, University of California Press, 2001, p.314
- 原文は「Mu's representative of the rural male underclass sees himself as cast off by his woman, who opts for modernity and the city, the double source of his oppression. To resist this oppression, Mu's protagonists in *Poles Apart* flaunt extreme masculine notions of male chivalry and brotherhood, making the critique of capitalist seduction and corruption a hyper-masculinist enterprise.」
- (11) スーザン・マン、小濱正子、リンダ・グロブ監譯『性からよむ中國史——男女隔離・纏足・同性愛』（平凡社、二〇一五年）二五—六ページ。
- (12) 注(11) 前掲書、三三—四ページ。
- (13) 穆時英「咱們的世界」『新文藝』第一卷第六號（一九三〇年二月）一〇七〇、七二二—七二三ページ。
- (14) 穆時英「黑旋風」『新文藝』第二卷第一號（一九三〇年三月）二九—三〇ページ。
- (15) 本作品における「女性嫌惡症」等心理學の用語に關しては、彭小妍『浪漫遊者與譯者』（聯經出版、二〇一二年）の第五章「一個旅行的現代病：「心的疾病」與摩登青年」（初出は「一個旅行的現代病——「心的疾病」、科學術語與新感覺派」『中國文哲研究集刊』第三四期、二〇〇九年）に詳しい。
- (16) 注(5) 前掲書、三二七—三二八ページ。注(15) 前掲書、二九八—二九九ページ。また、嚴家炎氏は「略說穆時英的文學史地位——『穆時英全集』代序」において、「作家把浪漫主義、寫實主義都看作『過時』的貨色」の例として該當の箇所を引用する。（嚴家炎・李今編『穆時英全集』第一卷、北京十月文藝出版社、二〇〇五年、三—四ページ）
- (17) ポール・モーランの翻譯および日本と中國の新感覺派との比較文學的研究は、錢曉波『中日新感覺派文學的比較研究——保爾・穆杭、橫光利一、劉呐鷗和穆時英（日本と中國の新感覺派文學に關する比較研究——ポール・モーラン、橫光利一、劉呐鷗、穆時英を中心に）』（上海交通大學出版社、二〇一三年）の第二章「ポール・モーランと日本および中國の新感覺派文學」に詳細な分析がある。
- (18) たとえば、渡邊一民氏は堀口の譯文を「大正末から昭和にかけて日本の文壇に大きな衝撃をあたえたモーランの『夜ひらく』の文體の新しきが、じつはモーランのフランス語を下敷きにした譯文の新しさだった」[原文とは一味違った、難解ではあるが新鮮で大膽な、讀者に衝撃をあ

たえずにはおかぬ、独自の文體を創造した」と評價する。渡邊一民「故郷離脱者と故郷喪失者——『アプレリゲール』のバリ——」『文學』第四卷第四號（一九九三年二月）一六八ページ。

(19) 注(17) 前掲書、一〇二ページ。

(20) 注(10) 前掲書、三七七八ページ。原文は「Like Liu Naon's modern girls, Rongzi, as the embodiment of urban modernity, provides the Chinese male protagonist an opportunity to experience a simulated urban romance in Hollywood style, but he finds himself emasculated in the process.」

(21) 李今『海派小説與現代都市文化』（安徽教育出版社、二〇〇〇年）一一一ページ。

(22) 注(21) 前掲書、一三三、四ページ。

(23) たとえば、瞿秋白は同作品を「最近我方才發見了一本小小説、題目是「被當做消遣品的男子」。單是這個題目就夠了！」とこきおろす。司馬今（瞿秋白）「財神還是反財神」『北斗』第二卷第三四期（一九三二年七月）四九三ページ。

(24) 穆時英「上海的狐步舞」『現代』第二卷第一期（一九三二年一月）および、「夜總會裏的五個人」『現代』第二卷第四期（一九三三年二月）。兩作品は單行本『公墓』（現代書局、一九三三年五月）に収録される。

(25) 齋藤敏康「雜誌「現代」における施蛰存そして劉呐鷗」『静岡大學教養部研究報告 人文・社會科學篇』第二四卷第二號（一九八八年）一八四—一八七ページ。

(26) 「編輯的話」『新文藝』第一卷第六號（一九三〇年二月）一二二—一二六ページ。

(27) 例えば、張建民「穆時英の「プロレタリア體驗」について」『野草』第七六號（二〇〇五年）が挙げられる。

穆時英におけるモダン都市の性愛と堀口大學

(28) 穆時英「女人」『中國學生』第一八號（一九三〇年六月）三四—三六ページ。

(29) 注(28) 前掲書、三五—三六ページ。

(30) 注(17) 前掲書、一一五—一二六ページ。

(31) 例えば、以下の作品が挙げられる。穆時英「新秋散記」『晨報』小晨報（一九三五年九月二日）。劉呐鷗「你夫人是中國人嗎」『晨報』晨曦（一九三五年九月一—二四日）。橫光利一、高明譯「竹花」『晨報』晨曦（一九三五年九月一—三日）。橫光利一、高明譯「鯉魚」『晨報』晨曦（一九三五年九月一—四日）。橫光利一、高明譯「水晶」『晨報』晨曦（一九三五年九月一—八日）。堀口大學「驪人漫語」『晨報』小晨報（一九三五年一〇月二—四日）。堀口大學「望翠樓雜記」『晨報』小晨報（一九三五年一〇月二—八日）。堀口大學の作品「驪人漫語」「望翠樓雜記」はどちらも、文學に關する逸話の紹介であり、『季節と詩心』（第一書房、一九三五年）に収録される。翻譯者は不明であるが、同じ二八日に掲載された穆時英の「葡萄」が、「呐鷗的園子裏」での出來事を語りつつ、堀口大學の『季節と詩心』を紹介していることから、「驪人漫語」および『望翠樓雜記』の翻譯者も劉呐鷗ではないかと推測できる。

(32) 堀口大學「望翠樓雜記」『晨報』小晨報（一九三五年一〇月二八）。

(33) 穆時英「葡萄」『晨報』小晨報（一九三五年一〇月二七—二八日）。

(34) 迅侯「穆時英」楊之華編『文壇史料』（中華日報社、一九四三年）二一—二二ページ。

「満肚子堀口大學式的俏皮話、有着橫光利一的小説作風、和林房雄一樣的在創造着簇新的小説的形式、這便是穆時英先生的內容。」

(35) 蘇雪林「第四十四章 新感覺派穆時英的作風」『中國二三十年代作家』（純文學出版社、一九八三年）四四—一二二ページ。なお、該書は一九三〇年代の武漢大學における講義をもとにしたものである。

(36) 穆時英「斷了條胳膊的人」『現代』第一卷第四期（一九三三年八月）。

のちに『南北極』改訂版（現代書局、一九三三年一月）に収録される。同作品については、拙論「穆時英「片腕を切断された男」論——反復される切断の表象に着目して——」『集刊東洋學』一二六號（二〇一七年）を参照。